HERO

チェリ→

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＨＥＲＯ

【Ｎコード】
Ｎ４５３３Ｅ

【作者名】
チェリ↓

【あらすじ】
毎朝電車の中で見つめるだけだったヒーロー。
ところがある日、無理矢理参加させられた合コンの中に彼が……っ！？
２００，０００ＨＩＴ記念特別番外編を当サイトにて公開中！⇒ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｃｈｅｒｒｙ－ｓｏｚａｉ．ｃｏｍ／

―Prologue―

私が毎朝乗っている電車に、毎朝ヒーローが乗ってくる。
そのヒーローは私が乗る駅の二つ先の駅から乗ってくる。
そして私と同じ車両に乗る。

だけど、私とヒーローの距離は近くはない。
私が乗るドアの一つ隣のドアから乗ってくるから。

だから、遠くもない。

私はそのヒーローにかれこれもう一年くらい片想いをしている。

高校に入学してすぐ、毎朝同じ電車に乗ってくる彼の姿が
気になるようになった。
いつも同じ電車、同じ車両、同じドアから乗ってくる人。

そして私はいつも少し離れた所から見つめていた。

私が彼の事を“ヒーロー”と呼び始めたのは、

同じ電車に乗るようになって半年くらい経った頃、

私と同じ駅で降りるヒーローと

たまたま帰りも一緒になってホームで電車を待っていた時。

ホームにいた小さな男の子が母親がちょっと目を離した隙に

線路に落ちてしまった事があった。

そして彼は、駅員が駆けつけるよりも早く、

線路に下りて男の子を抱きかかえ、ホームに上がってきた。

私はそれ以来、彼の事を“ヒーロー”と呼んでいる。

名前も学年もどこの学校かさえわからない“ヒーロー”・・・。

―1―

「おっさん！いい年こいて痴漢なんかしてんじゃねぇよっ！」

少し混雑した朝の電車の中、聞こえてきた声にハッと顔をあげると中年男性の手首を捻り上げながら睨みつけているヒーローがいた。

私は初めてはっきり聞こえたヒーローの声に少しドキリとした。

だけど、気になるのはヒーローが言った言葉。

どうしたんだろう？と思いながら、よく見ると

ヒーローと中年男性の前にどこかの高校の制服を着た女の子が立っていた。

要するにヒーローはその女の子に痴漢をした中年男性を捕まえたようだ。

さすがは“ヒーロー”。

電車が次の駅に着いてドアが開くと、ヒーローは中年男性を引きずり降ろした。

女の子も一緒に降りていき、それと入れ替わるように乗客が乗って来た。

発車のベルが鳴ってドアが閉まると、駅員に痴漢を引き渡しているヒーローが見えた。

私はその様子をずっと見ていた。

電車が発車して、段々小さくなって見えなくなるまで。

今日はヒーローの顔、あんまり見られなかったな・・・。

私は少しだけちょっと残念に思いながら、

痴漢から助けてもらった女の子が羨ましかった。

―――次の日。

ヒーローはいつもと同じ様に同じ駅で同じドアから乗って来た。

だけど・・・一つだけ違うことがあった。

それはヒーローが乗って来た次の駅で

昨日の痴漢から助けてもらった女の子が乗って来た事。

その女の子はヒーローを見つけるとすぐに笑顔で話しかけていた。

私はなんだか胸にグサリときた。

だって・・・ヒーローもその子に優しい笑顔を向けていたし、

すごく楽しそうに話していたから。

そーゆーのが切欠で付き合い始める・・・のもよくある話。

“あの子だけのヒーロー”になっちゃうのかなぁ・・・？

自然と出てきた深いため息と一緒に
ヒーローへの想いが消えてしまえばいいのに・・・なんて思った。

そして、次の日もその次の日もまた・・・
彼女はあの日以来、ヒーローと同じ時間、同じ電車の同じ車両に
同じドアから乗ってくるようになった。
・・・で、当然私は毎朝二人の楽しそうな光景を目の当たりにする
ワケで。

車両・・・変えようかな。

次の日から私はいつも乗っていた車両の隣の隣に乗るようになった。
隣の車両だと、なんとなく気になってついつい見てしまいそうだっ
たから。

そしてまた二人の姿が目に入った時、胸がチクリとしそうだったから・・・。

あ～ぁ・・・一年間の片想いがこんな風に終わるなんてちょっと切ないな・・・。

けど、車両を変えたからか、いつもと違う顔ぶれの電車内は
ちょっと新鮮で、ちょっとだけヒーローの事を忘れさせてくれた。
ホントにちょっとだけだけど・・・。

それから数日が経って、電車内の違う顔ぶれにも慣れかけてきた頃。
ヒーローがいつも乗ってくる駅に停車して発車のベルが鳴り響き、
あと少しでドアが閉まる・・・という時、一人の男子高校生が飛び乗って来た。
勢い良く飛び乗ったと思われるその彼は、
少し俯いて立っていた私に少しだけぶつかった。

「・・・あっ！ごめん！」

慌てて言ったその彼を何気なく見上げた私は心臓が止まるくらい驚いた。

だって・・・乗って来たのは・・・

あの“ヒーロー”だったから・・・・。

「い、いぇ・・・・。」

咄嗟に目を逸らしてみたけれど・・・・

顔・・・赤くなってるかも・・・・っ！

“ヒーロー”が目の前にいる・・・・

しかもこんな間近に・・・。

心臓飛び出そう・・・。

いつも少し離れたところからしか見てなかったから、

こんな近くだと顔もあげられない。

いつも降りる駅までの時間がやけに長く感じ、

やっと着いてホームに降りるとなんだかどっと疲れが出た。

でも、よく考えればきっとこんな事は今日だけなんだし、

思い切って穴が開くくらいヒーローの顔を見ておけばよかったと後悔した。

・・・だけど、ヒーローはそれからずっと、また私と同じ車両に乗るようになった。

しかも、前みたいに違うドアじゃなくて、同じドア。
だから、私は毎朝ドキドキしながら乗ることになってしまった。

そして、さらに数日が過ぎたある日。
明日から夏休みという日の朝。
いつものように電車を降りて改札を抜けると
少し前を歩いていたヒーローが定期入れを落とした。
制服の内ポケットに入れようとして落としたらしい。
しかも彼は落とした事に気付かないままスタスタと歩いていった。

「あ・・・ちょ・・・っ・・・」
私は呼び止めようとしたけれど、まさかここで“ヒーローさん”なんて
呼べるはずもなく、とりあえず定期入れを拾った。
私が顔をあげて再びヒーローの姿を目で追おうとした時には、
もうその姿はなく、すっかり見失ってしまった。

「あ、あれ・・・？」

どうしよう・・・。

私は自分の手の中にある定期入れをじっと見た。

きれいな水色の定期入れ。

爽やかな印象を与えるその色は私が“ヒーロー”に抱いた

第一印象のイメージとぴったりだった。

そっと中身を見てみると、Ｓｕｉｃａと学生証が入っていた。

学生証の写真は今のヒーローよりも少しだけ幼くて、

おそらく中学を卒業して高校に入る前に撮った写真なんだろう・・・

と

予測できた。

名前は・・・窪田遼太郎。

私はこの時初めて片想いの相手のフルネームを知った。

そして、学校も学年もこの時わかった。

都立H高。

私が通っている女子高の兄妹校の男子校だ。

理事長が同じでその昔は共学校だったけど、なぜか男子校と女子校に分かれた。

だから私の高校のすぐ近くにH高はあったりする。

学年は私と同じ2年生。

・・・届けたほうがいいのかな？

学生証も入っているし、なにより明日から夏休みに入る。

Ｓｕｉｃａと学生証がないといろいろ困るかもしれない。
私は定期入れを届けに彼の通うＨ高に向かって歩き始めた。

Ｈ高の正門の近くまで来るとさすがに周りは男子ばっかりになった。
歩いている女の子は私一人。
一瞬、来るんじゃなかったかな・・・なんて思ったけど、
ここまで来て引き返すわけにも行かない。

私は少し足早に正門の前まで行き、
登校してくる生徒に「おはよう。」と声を掛けている先生に近づいた。

「あ、あのー・・・」

「ん？何？」

上下ジャージを着た、いかにも体育会系の男の先生。

スラッと伸びた長身のその先生は、私の姿を認めると

優しい口調で返事をしてくれた。

「え・・・と、これ・・・駅で拾ったんですけど・・・」

私はヒーロー・・・もとい、窪田くんの定期入れを先生に差し出した。

「定期入れ？」

「はい、・・・あの、それで中を見させてもらったら

ここに通ってる人だったので・・・」

「あ、ホントだ。」

男性教師は私から定期入れを受け取ると、中にある学生証を見た。

「窪田なら、ちょうど俺が受け持ってるクラスの生徒だから、
渡しておくよ。」
どうやら窪田くんの担任だったようだ。
「あ、はい・・・それじゃ、お願いします。」
「・・・っと、名前・・・聞いていいかな?」
逃げるように踵を返した私を慌てて先生が呼び止めた。
「えと・・・坂本璃桜です・・・。」
「坂本璃桜さんね。じゃ、ちゃんと伝えておくから・・・ありがとね。」
男性教師はそう言うと私に柔らかい笑みを向けてくれた。

―2―

定期入れを届けたおかげで遅刻ギリギリになった私は
ダッシュで学校に向かい、教室に飛び込んだ。

「おはよう、璃桜。」

とりあえず遅刻しないで済んだと安心していると、
私の隣の席に座っている栗田アキが声を掛けてきた。
アキとは高校に入ってからの付き合いだけど、
なぜか波長が合うからか、今では親友と呼べる仲だ。

「・・・おはよう。」

まだ息が整っていない私はゼェゼェ言いながらアキに軽く手を振った。

「ねぇ、璃桜。明日、合コン来ない？」

「へ？ご、合コン・・・？」

朝っぱらから何を言い出すのかと思えば・・・。

「・・・パス。」

「えー、なんでー？」

なんでと言われれば、理由は一つしかない。

窪田くんが好きだから。

好きな人がいるのに合コンに行くのは・・・ちょっとね・・・。

「璃桜、毎回誘っても来ないし・・・一回くらい来てよー？」

「えー。」

「イケメン来るよ？」

いや・・・そーゆー問題じゃ・・・。

「今回、いつもと違うメンバー連れてくるように言われてるのよー。」

「誰によっ？」

「男子チームの幹事。」

「あー、アキの従兄弟？」

「そそ。」

アキには同い年の従兄弟の男の子がいる。

そして毎回、その従兄弟くんと組んで合コンをしているのだ。

「今回どうしてもあと一人新しい子を連れて来いって言うのよー。」

「えー、だからって、なんで私なの？」

「だってもう璃桜しかいないんだもん。」

「うーん・・・。」

「お願いっ！璃桜っ。」

結局、この後私はアキに拝み倒され続け、根負けし、

合コンに行くハメになった。

個室でカラオケもできるお店で４対４の合コン。

あまり気が進まないけど、ただみんなで遊びに行くって
考えればいっか。

———翌日、土曜日。
午後7時に女の子だけで待ち合わせ。
男の子達とは直接お店で待ち合わせをしている。
アキになるべく可愛い格好をして来いと言われた私は、
ミニスカートで行った。
フレアで淡い水色の結構お気に入りのモノだったりする。

今日のメンバーは女の子の方は、アキと私、隣のクラスの柚木さん、
後はその柚木さんの友達。
男の子の方はアキの従兄弟くんとその友達3人。

待ち合わせ場所にはすでにみんな来ていた。

・・・早っ！？

まだ１０分前だというのに・・・

まぁ、そーゆー私も早いけど・・・。

４人揃った私達は男の子達が待っているお店に向かって歩き始めた。

お店に入ると男の子達の方もすでに４人揃っていた。

そして、その中の一人によく知った顔があった。

あ・・・

「あ・・・。」

その男の子も私と目が合うと小さく声をあげ、驚いていた。

窪田遼太郎くんだった。

“ヒーロー合コンへ行くの巻”・・・まぁ、ヒーローも所詮は

“普通の男の子”だった・・・と。

「リョウ、知ってる子？」

そう言って私の目の前に座っている男の子が、

私と窪田くんの顔を交互に見た。

「・・・いや・・・、知ってるってゆーか・・・

毎朝、乗る電車一緒なだけなんだけど・・・。」

「へぇー、そーだったんだ・・・てか、とりあえず

自己紹介からしようか。俺は相葉貴教、

ちなみにアキの従兄弟。よろしくねー。」

目の前に座っている男の子はアキの従兄弟くんだった。

なんだかちょっとチャラチャラしてるっぽい人だ。

男の子達の自己紹介が終わって、アキ達が自己紹介した後、

最後に私が「坂本璃桜です。よろしくね。」と自己紹介すると、

「えっ！？」と、またも窪田くんが驚いた。

「・・・？」

なんだろう・・・？

私が不思議そうな顔をしていると

「坂本さんて・・・もしかして・・・昨日、俺の定期入れ届けてくれた人？」

と言った。

「あ・・・うん。」

確かに昨日、学校に届けに行った。

窪田くんの口からその事が出たという事は、

無事に窪田くんの手に戻ったという事か。

「それって昨日、お前の定期入れをわざわざ学校まで

届けに来てくれたって担任が言ってた子？」

アキの従兄弟くん・・・相葉くんもその事を知っているみたいだ。

「うん、学校だけは制服でわかったらしくて教えてもらったんだけど・・・

後は名前だけしか聞かなかったみたいだし、顔も学年もわかんないし、

だから、今日ちょうどお前の従兄弟にでも、その“坂本璃桜”さんの事、

聞いてみようかと思ってたんだ。」

「おぉ、じゃ、まさに恩人に出会えたワケだ？」

「恩人だなんて大袈裟だよー。」

私はクスクスと笑った。

すると窪田くんは意外にも「いや、恩人だよ。」と言った。

「あの定期入れ結構気に入ってるから、

落としたのがわかった時はマジでヘコんだし。」

「そうだったんだ。」

「うん、ホント助かったよ。ありがとう。」

窪田くんはそう言うと私ににっこりと笑ってくれた。

私はその笑顔にキュンとした。

初めて私だけに向けられた笑顔・・・。

でも、その笑顔はすぐに別の女の子にも向けられた。

窪田くんは基本的に愛想は悪くない。

だから、アキや柚木さん達が話しかければ

普通に笑顔でしゃべっている。

そして私も相葉くん達と話していたから、結局、

窪田くんとまともに会話できたのはそれだけだった。

もっと窪田くんと話したかったなぁ・・・。

―3―

―――翌日、日曜日。

昼飯を食った後、自分の部屋で雑誌を見ていると

タカから電話が掛かってきた。

「もしもし？」

『もしもし、今日、夕方から暇？』

「うん？とりあえず予定ないけど？」

『じゃあさ、『ホタル祭り』行かね？』

「『ホタル祭り』？」

『うん、まぁ“祭り”って言ってもホタルを見るだけなんだけど。』

「へぇ、でもそれ良さそう！行く、行く！」

『おぉっ！やった！これで璃桜ちゃん誘えるっ！』

「・・・坂本さん？」

『うん、ホントはさー、璃桜ちゃんと二人で行きたいところなんだけどさ、

アキがいきなり二人でって言うのは璃桜ちゃんが嫌がるんじゃないかって言うから

それなら、お前とアキも誘えばいいかなーっと思って。』

「なんだ、そーゆーコトかよ・・・。」

『んじゃ、駅に6時半な。』

タカはそれだけ言うとさっさと電話を切りやがった。

・・・てか、タカの奴・・・坂本さん狙ってんのか・・・。

―――午後6時半。

待ち合わせ場所の駅に着いた俺の目に真っ先に飛び込んできたのは

坂本さんの姿だった。

裾にレースのリボンがついているデニムのクロップドパンツを穿いている。

昨日のミニスカートも可愛いと思ったけど、細くてきれいな足をしている所為か、

惚れた弱みなのか・・・制服とは違う彼女の姿にやられた。

“惚れた弱み”・・・と言うのも、俺は高校に入ってからずっと

彼女に片想いをしていた。

最初は、毎朝電車が一緒になる可愛い子だな・・・と思うだけだった。

だけどそれがいつの間にか段々、彼女の姿を目で追う様になっていた。

名前も学校もわからない・・・唯一つわかっていることは

水色が好きだという事。

彼女はよく水色の物を持っていた。

定期入れや腕時計、冬の寒い日はマフラーと手袋も水色が基調になっている物だった。

だからきっと水色が好きなんだろうな・・・と思った。

先日、俺が落とした定期入れも彼女を意識して買った物だ。

「お、来た、来た。」

タカとタカの従兄弟、栗田さんは俺に気が付くとにやりとした。

「こんばんは。」

背があまり高くない坂本さんは俺の顔を見上げるように

視線を合わせ、笑ってくれた。

昨日は無理矢理連れて行かれた合コンで彼女に会えて、

しかも定期入れを届けてくれた女の子が坂本さんだとわかって嬉しかった。

だけど、いろんな邪魔が入ってまともに彼女と話すことが出来ず、

結局、携帯の番号も聞けず仕舞いだった。

でも今、俺だけにこうして笑顔を向けてくれた事が

結構・・・いや、かなり嬉しかったりする。

だけど・・・その幸せはそう長くは続かなかった。

「んじゃ、行こか。」

そう言ってタカはいきなり坂本さんと並んで歩き始めた。

・・・先を越された・・・。

完全に出遅れた・・・。

俺はちょっとへコみながら二人の後ろを歩き始めた。

唯一つ救いだったのは、俺の隣に並んだ栗田さんが

昨日の合コンに来た女共みたいにべらべらと自分の事ばかり喋って

こない事だった。

時々、自分の話も交えながら坂本さんの事を話してくれた。

「あ、そういえば・・・一昨日、坂本さん遅刻とかしなかった?」

「窪田くんに定期入れ届けた日?」

「うん、そう。」

「あー、なんかギリギリに来たけど、遅刻はしなかったよ？」

「そっか・・・それならよかった。

ちょっと気になってたんだ・・・。」

俺の所為で坂本さんが遅刻したりしたら洒落にならない。

俺の学校もそうだけど、兄妹校の女子高の方も

遅刻にはかなり厳しいからだ。

俺の学校では遅刻をすると放課後、道場の畳の上で2時間の正座。

女子高の方も茶道室で2時間の正座らしい。

「・・・璃桜も気にしてたっぽいよ？」

「え？」

「“ちゃんと定期入れ無事に戻ったかなぁ・・・・？”って。」

あ・・・そっちの“気にしてた”ね・・・。

「・・・そう、なんだ？」

「・・・・。」

「・・・・。」

「・・・もしかしてさ？」

しばしの無言の後、栗田さんは何か言いたげに俺に耳を貸すよう手招きした。

「・・・・ん？」

「窪田くんも、璃桜の事・・・狙ってんの？」

俺が耳を近づけると栗田さんは前を歩いているタカと坂本さんに聞こえないように囁いた。

・・・“も”って事は・・・やっぱタカもなのか。

「・・・。」

俺が否定も肯定もしないのを栗田さんはどう受け取ったのかわからないけれど・・・

なにやら少し口の端をちょっとだけあげた。

そして、少しだけ歩くスピードを遅くして前の二人と距離をとった。

「実は璃桜ってさ、昨日・・・初めてだったんだよ。」

「へ？」

何が・・・？

・・・ま、まさか・・・

俺が帰った後に・・・タカの奴ともう・・・

「合コン。」

「・・・あ・・・そなの？」

好からぬ妄想をしていた俺はちょっとだけ拍子抜けした。

「うん、今まで何回誘っても来なかったんだよねー。」

「へー、なんで？」

「んー、璃桜はちょっと人見知りって言うのもあるけど
私みたいにチャラチャラしてないからねー。」

「ふーん・・・。」

「・・・ちなみに、璃桜はちょっと強引な位がいいと思うよ？」

「何それ？」

「まぁ、所謂“押し”に弱いってヤツ？」

「・・・てか、なんで俺にそんな事言うの？

栗田さんはタカの方を応援してるのかと思ったけど・・・？」

「あー、確かにタカも璃桜を狙ってるって言ってたけどね。」

やっぱな。

「でも、璃桜はタカの事、苦手なんだと思うよ？」

「なんで？」

「タカはグイグイ行き過ぎだから。」

「・・・？」

「要するに、強引すぎるって事。

それにチャラチャラしてるし。」

「なるほど・・・。」

「“ちょっと強引”・・・これがミソ。」

「・・・覚えとくよ。」

それから、俺達４人は『ホタル祭り』の会場・・・と言っても
雑木林に囲まれた川辺だけど・・・に着いた。

だけど・・・そこで、俺は会いたくない人物と会ってしまった・・・
。

―4―

「あ、窪田くんっ。」

『ホタル祭り』が行われている川辺を歩いていると、

私達の目の前に3人グループの女の子達が来た。

その中の一人は、私も見覚えがある子だった・・・。

以前、窪田くんが痴漢から助けた女の子・・・。

その子はすぐに窪田くんに駆け寄ると可愛く笑っていた。

私は思わずその二人から目を逸らした。

「ねぇ、私達も一緒にいい？」

「え・・・。」

窪田くんは少し言葉に詰まっていた。

「いいんじゃね？」

軽くそう答えたのは私の隣にいた相葉くんだった。

「やった！」

その女の子は嬉しそうに言うとさっそく窪田くんと歩き始めた。

なんか・・・おもしろくないな・・・。

別に窪田くんと付き合ってるワケじゃないし、

ただ毎日電車が同じっていうだけだけど・・・

そりゃ・・・二人で来たワケでもないし。

人数が多いほうが楽しいのかもしれないけれど・・・。

・・・てか、窪田くんは何も言わないんだね？

嫌なら嫌って言うだろうし・・・。

むしろ・・・嫌じゃないから断らなかったのかな？

いろんな事を考えながら・・・ため息をつきながら

そして、ちょっとショックを受けながら歩いていると

ゴロゴロと転がっている石に躓いた。

「きゃっ・・・！？」

見事にバランスを崩して、転びそうになった私を

支えてくれたのは一緒に歩いている相葉くんだった。

がっちりとした腕に支えられ、私は相葉くんの胸の中へ

吸い込まれるように倒れこんだ。

「あ・・・ご、ごめんっ。」

慌てて体を離して、横目で窪田くんをちらっと見た。

・・・すると・・・窪田くんはバッチリその様子を見ていた。

あ～ぁ・・・一番見られたくない人に見られちゃったな・・・。

―――8月。

夏休みの間にある登校日。

いつもと同じ時間の同じ電車、同じ車両に乗って、

窪田くんが乗ってくるかも・・・と少し期待をした。

だけど、窪田くんは乗って来なかった・・・。

兄妹校といえど、さすがに登校日は別か・・・。
ちょっとがっかり・・・。

放課後・・・と、言ってもお昼前。
特に授業もなく、先生の話があるだけで学校が終わり、
アキと一緒に教室を出て、正門に向かって歩いていると、
門柱の日陰に立っている男の子の姿が目に入った。
そして、その男の子は私の姿を捕らえると
無言で近づいてきた。

「く、窪田くん・・・？」

どうして、窪田くんがこんな所に・・・？

「ちょっと・・・いい？」

窪田くんは通りすがりにぶらりと立ち寄った感じでもなくて、

それは明らかに1時間くらい待っていたと思われる汗をかいていた。

私達3人は駅の近くにあるファーストフードに入った。

お店の中は冷房が効いていて、夏の暑さと

私の顔の火照りを一気に冷ましていった。

「ところでなんであんな所にいたの？」

私の聞きたい事をアキはさらりと窪田くんに聞くと

冷たい氷が入ったジュースのストローに口をつけた。

「・・・あのさ・・・、明日なんだけど・・・暇？」

アキが聞くまで黙っていた窪田くんはようやく本題に入った。
私はてっきりアキに言ってるんだと思って黙っていると
「璃桜に聞いてるんだよ？」とアキに言われた。

「へ？」

私？

「暇だけど・・・。」

いや・・・てか、アキにも聞いてるよね？

「花火大会行かない？」

私の真向かいに座っている窪田くんはアキの返事も聞かずに話を進めた。

「え・・・あ、うん。」

とりあえず私は「うん。」と答えてアキの反応を待った。

待ったけど・・・

「・・・・。」

私の隣に座っているアキはおいしそうにポテトを食べている。

「・・・アキも行くよね？」

私がそう聞くと「ん？私は明日、予定があるから。」と

あっさり言われた。

・・・え？

じゃ、明日は窪田くんと二人？

「じゃあ、明日6時に駅で待ってるから。」

窪田くんはにっこり笑った。

あ、でもきっと相葉くんも来るよね？

「うん・・・わかった。」

アキが来ないのは残念だけど、窪田くんと二人きりは

正直まだ恥ずかしいというか・・・どうしていいかわからない。

でも、相葉くんも来るならきっとそんなに緊張せずに済む・・・かも？

―――次の日。

待ち合わせの駅に着いて改札を出たところで窪田くんを見つけた。

「窪田くんっ。」

窪田くんは私じゃない声に振り向いた。

私が口を開くよりも先に誰かの声が窪田くんを呼んだ。

私は少し後ろから聞こえた声に振り返ってみた。

またあの女の子達だった・・・。

「窪田くんも花火大会行くの？だったらまた一緒していい？」

窪田くんが痴漢から助けた女の子はニコニコしながら

窪田くんに駆け寄っていった。

・・・窪田くん・・・この間も嫌って言わなかったし、

きっと私なんかよりあの子達と居た方が楽しいんだろうな・・・。

窪田くんはきっと私が居た事に多分気付いていないはず、
だって、視線はあの子達の方に向いていたし、
このまま私が帰っても何も言われない。
相葉くんには・・・後で電話しておこう。
私はそのまま黙って踵を返した。

ホームに行くとちょうど電車が入って来るところだった。
電車がホームに停車してドアが開き、
私が乗ろうとした瞬間、いきなり後ろから腕を引っ張られた。
「っ！？」
何っ！？

引っ張られた勢いで後ろに倒れそうになりながら
振り向くと、窪田くんが私の腕を掴んでいた。

嘘・・・っ！？

「なんでいきなり帰ろうとしてんだよっ！？」

「な、なんでって・・・」

バレてた・・・？

「あの子達が居たから？」

その通り・・・。

「・・・。」

私は無言のまま頷いた。

発車のベルが鳴り響き、電車のドアが閉まった。

あ・・・て、もう捕まっちゃったから

次の電車で帰るわけにも行かないか・・・。

「行こう。」

窪田くんはそう言うと私の腕を掴んだまま改札に向かって歩き始めた。

あの子達と一緒に行ったんじゃなかったの・・・？

そう聞きたくて、でも聞いてしまえば「待たせてるから一緒に行こう。」

とか言われるのが嫌で・・・

窪田くんが引っ張っている力で歩いている状態で

改札の手前まで来ると、あの子達がいた。

窪田くんを捜しているみたいだ。

私はぴたりと足を止めた。

すると窪田くんは私の方に視線を向けて

「俺、あの子達とは行く気ないよ？」

と言った。

「えっ。」

私はその言葉にハッとして顔をあげた。

窪田くんは私に少しだけ微笑みかけると

掴んでいた腕を放して手を繋いできた。

そして一緒に改札を通るとあの子達の方に
ツカツカと歩いて行った。

・・・で、案の定、あの子達に見つかった。

「窪田くん、急に走り出すからどうしたのかと思った。
ね、早く行こうよ。」
痴漢から助けた女の子はにっこり笑って近づいてきた。

窪田くん・・・一緒に行く気ないってさっき言ったけど・・・
この子達の方は一緒に行く気満々だよ？

「彼女と一緒に行くから・・・だから、一緒には行かないよ。」
どうするのかな？と思っていたら、
窪田くんはあっさりとその女の子達に言い放った。

「え・・・彼女って・・・窪田くん、
この間“彼女”いないって言ってたじゃない。」
痴漢から助けてもらった子は怪訝な顔をした。

・・・え？

えぇ・・・っ！？

彼女・・・って・・・そーゆー意味の“彼女”？

違うよね？

「言ったけど、でも今はこの子と付き合ってるから。」
窪田くんはそういうと地味に後ずさりしていた私を
ぐぃっと引き寄せた。

う、うそぉー？

「じゃ、そういう事だから・・・璃桜、行こう。」

そして、女の子達を残し、“璃桜”と呼ばれた事にさらにびっくりしている私を連れて歩き始めた。

「あ、あの・・・窪田くん・・・？」

「ん？」

「な、何も“彼女”って嘘つくことは・・・」

「なんで？嘘じゃないけど？」

「え・・・で、でも・・・」

私、何にも聞いてないよー？

「俺、璃桜の彼氏になる事に決めたから。」

「そ、そんなのいつ決まったのっ！？」

「ついさっき。」

「へ？」

「タカに取られる前にと思ってさ。」

「あっ！？そういえば相葉くんは？」

相葉くんがまだ来てないのに、

花火大会に行っちゃマズいでしょ！？

「タカ？」

「相葉くんも来るんでしょ？」

「来ないよ。」

「えっ！？」

「今日はタカが来れないのをわかってて、璃桜の事誘ったんだよ。
ちなみに、栗田さんもそれをわかってて俺に協力してくれたってワケ。」

「・・・。」

マジデスカー？

「そんな事よりさっきの話。」

「・・・へ？」

「俺が彼氏じゃ璃桜は嫌？」

そう言うと窪田くんは真剣な目で私の顔を見つめた。

「・・・嫌じゃないよ。」

嫌な訳ないじゃん・・・。

「じゃ、決定。」

窪田くんはにこっと笑った。

そして・・・

ヒーローは“私だけのヒーロー”になった・・・。

続編　ー告白合戦・1ー

璃桜と付き合う事になった花火大会から数日後―――。

「リョウッ！？璃桜ちゃんっ！？」

璃桜と二人でファーストフードでお茶していると

聞き覚えのある声に呼ばれた。

俺がその声に振り返ると・・・

「・・・タカ。」

タカだった・・・。

しかも隣には栗田さんまでいる。

「なんでおまえと璃桜ちゃんが二人でいるんだよ？」

俺と璃桜の顔を交互に見ながら、タカは不思議そうな顔で言った。

そりゃそうか・・・だって、こいつにはまだ璃桜と付き合う事になったの

話していないからな。

タカも璃桜の事を狙っていたし、本当はちゃんと

言ったほうがいいんだろうとは思う。

思うけどわざわざ俺から電話して言うのもなんか嫌味かな・・・と思って

今度の登校日にでも言うつもりだった。

「なんでって・・・俺、璃桜と付き合う事になったから。」

「は？」

タカは口を開けたまま固まった。

「・・・・。」

「・・・・。」

「・・・・。」

そして沈黙する俺と璃桜と栗田さん。

「嘘だろ？なんだよ、それっ。」

タカは顔を強張らせると「璃桜ちゃん、ホントなの？」

と、璃桜に視線を向けた。

すると璃桜は無言でコクンと頷いた。

「・・・・。」

それを聞いたタカは少しの間黙り込み、

「璃桜ちゃん、ちょっと・・・・。」

と、璃桜の腕を掴み、スタスタと歩き始めた。

「おいっ！タカ！」

俺が慌てて止めようとすると栗田さんがそれを制した。

「大丈夫、ここで待ってようよ。」

何を根拠に“大丈夫”と言えるのかわからないけれど、

俺は栗田さんの言うとおり、おとなしく二人を待つことにした。

タカは璃桜を少し離れたテーブルに連れて行き、

向かい合って座るとさっそくなにやら話し始めた。

もちろん、俺がいるところからは会話の内容は

まったく聞こえない。

一体何を話してるんだ？

俺はそればかりが気になった。

そして、１０分もしないうちに璃桜だけが戻ってきた。

タカはというと、頬杖をついてそっぽを向いている。

「話は終わった？」

戻ってきた璃桜に栗田さんがそう聞くと

「うん。」

と、璃桜は少しだけ笑った。

「じゃあ、デートの続きをごゆっくりー。」

栗田さんはカタンッと小さく音を立ててイスから立ち上がると

俺と璃桜にひらんひらんと手を振ってタカの方へ歩いていった。

「・・・出ようか。」

別にこのままここにいてもいいけれど
なんとなく居辛かった。

「うん。」
そしてそれは璃桜も同じなのかすぐに返事をした。

それから、璃桜は何もなかったように俺と話をしていた。
タカと何を話したのか言わないし、
俺も敢えて聞かなかった。

ホントはすごく気になるけど、璃桜も何も言わないって事は
たいした話じゃなかったのかな？

「璃桜・・・。」

「ん？」

俺が名前を呼ぶと璃桜は可愛らしい笑みを浮かべながら

俺の顔を見上げた。

「あのさ・・・」

「？」

「・・・いや、なんでもない。」

タカと何を話したのか、何を言われたのか

すごく気になったけど、やっぱり聞く勇気が出なかった。

「？？？」

そんな俺の顔を璃桜は不思議そうな顔をしながらじっと見つめてい

た。

―――数日後。

この日は俺達の学校の登校日。

朝、教室に入るとタカが沈んだ顔で頬杖をついていた。

「おいっすー。」

「・・・・。」

とりあえずいつも通り、声を掛けた俺に対し、

タカは無言で顔を向けるだけだった。

こーゆー時、つくづくこいつの前の席じゃなきゃいいのに・・・と

思う。

だって、ほらっ。

後ろから感じる視線が痛すぎる・・・っ！

「・・・・。」

「・・・・。」

あぁ・・・もう耐えられない・・・。

後ろから感じる鋭すぎる視線に俺は我慢の限界を迎えた。

俺が後ろを振り返り、タカの顔をじっと見つめると

タカはいかにも何か言いたそうな顔で俺を見つめていた。

「・・・・。」

「・・・あのさ・・・タカ、璃桜の事なんだけど・・・」

「・・・・。」

頬杖をついたままタカは俺の口から出る次の言葉を待っていた。

「おまえには悪いと思ってるよ。けど、俺・・・ずっと璃桜の事、

好きだったんだ。

だから、どうしてもおまえに取られたくなかった。」

「随分とハッキリ言ってくれるな。」

「・・・悪ぃ。」

「まぁ、おまえのそーゆートコ嫌いじゃねぇけど。」

「そりゃ、どうも。」

「・・・・。」

「・・・・。」

そして、しばしの沈黙。

「けど、どの道俺は璃桜ちゃんにフラれてたけどな。」

俺がこの間の事を聞いてみようか、どうしようかと思っていると

タカが意外な事を口にした。

「どういう事だよ？」

「この間、ファーストフードでおまえらにバッタリ会って

璃桜ちゃんと二人で話した時にさ、

俺がリョウよりも先に告ればよかったって言ったら
璃桜ちゃんなんて言ったと思う？」

「さぁ？」

「璃桜ちゃんもおまえの事、ずっと好きだったんだとさ。」

「へ？」

「高校に入って毎朝電車で会うおまえの事が気になるようになって、
ここ1年くらいずっとおまえに片想いしてたって。
だから、もし俺に告られてても俺の気持ちに応える事はできなかったって。」

「璃桜がそう言ったのか？」

「あぁ。」

璃桜も俺の事を・・・？

「そんなキッパリ言われるとさすがにヘコむよなぁ・・・。」

タカはそう言うと机に顔を伏せた。

続編　―告白合戦・２―

―――翌日。

「璃桜。」

昼過ぎ、デートの待ち合わせ場所に行くと、

彼女の方が先に来ていた。

俺が手を振りながら名前を呼ぶと

璃桜は嬉しそうに笑って手を振り返してくれた。

ちなみに今日は映画デート。

映画館に入ると、今話題の恋愛映画だからか

かなりの人で混んでいた。

狭くもなく広くもないカップルシートは

ちょうどいい広さの二人だけの空間だ。

「はい、璃桜。」
冷たいオレンジジュースが入った紙コップを
璃桜に手渡すと「ありがと。」
と、璃桜はにっこり笑った。

映画のストーリーは勢いだけで付き合い始めた二人が
実は両想いだったけど、それを口にする事が出来ずに別れてしまう
話。
・・・て、まぁ最後はちゃんとハッピーエンドなワケだけど。

映画の中の主人公達は純粋でものすごくじれったくて
お互いの想いをなかなか口にしない。
そしてそれが元でお互いの事が信じられなくなって
離れていってしまう・・・。

そこで俺はふと、ある思いが頭を過ぎった。

俺もまだ璃桜にちゃんと本当の気持ちを伝えていない・・・。

ちゃんと“好き”って言葉を璃桜に言っていない。

花火大会の夜に俺から強引に璃桜の“彼氏”になると宣言した。

その時、璃桜は俺が彼氏になる事に嫌じゃないと言ってくれた。

でも・・・それは璃桜も俺の事を好きでいてくれたからで・・・

璃桜は俺の気持ちをまだ知らない。

俺は隣にいる璃桜の手をぎゅっと握った。

すると、少し驚いたように璃桜は俺の顔を見上げた。

そして、すぐに俺の手を握り返してきた。

それから俺と璃桜は映画が終わるまでずっと手を繋いだままだった。

映画が終わり、ほとんどの人が席を立った後、
俺と璃桜はまだ手を繋いだまま座っていた。

「璃桜・・・好きだよ・・・。」
璃桜の手を握ったまま引き寄せて耳元に囁くと、
璃桜は顔を赤くして黙り込んだ。

「・・・・。」

「・・・・。」

「私も・・・遼くんの事・・・好きだよ。」

少しの沈黙の後、璃桜が思い切ったように口を開いた。

「うん・・・知ってる。」
俺がそう言うと璃桜はじっと目線を絡ませてきた。

「昨日、タカから聞いた。
この間、ファーストフードで話した事とか。」

「そ、そうなんだ・・・。」

「璃桜も俺の事、好きだったの？」

「うん。」
璃桜はコクンと頷いた。

「でも、先に好きなったのは俺だけど。」

俺がそう言うと璃桜は

「そんな事ないもん、私の方が先だもん。」

と、言った。

「じゃ、璃桜はいつから？」

「んと・・・去年の６月くらいから。」

「なら、俺の方が先だよ。」

「え？」

「俺は去年の５月くらいから。」

俺の言葉に璃桜は驚き、やや固まった。

「俺、ずっと璃桜の事が好きだった。」

桜色をした璃桜の唇にそっと唇を重ねて軽くキスをすると

俺の手と繋がったままの璃桜の指が微かにピクリと動いた。

「俺の勝ち。」

「うー・・・。」

俺が誇らしげに言うと璃桜は言葉に詰まった。

「た、確かに遼くんの方が先に好きになったのかもしれないけど

私の方が細胞レベルで遼くんの事好きなんだもん。」

「ははは、なんだそれ？意味わかんねー。」

なんとなく意味はわかるけど敢えてわからないフリをした。

てか・・・璃桜って意外と負けず嫌い？

「私の勝ち。」

「違う、俺だよ。」

俺は璃桜の口を塞ぐようにもう一度唇を重ねた。

今度は、さっきよりも長く・・・。

「俺の勝ち。」

璃桜の唇を解放するとまだ何か言いたそうな顔で俺を見上げていた。

だけど、何度言ったって同じ・・・俺の方が璃桜の事、好きなんだから・・・。

「俺の勝ちー。」

「むー・・・。」

「俺の方が璃桜の事、好きなの。」

璃桜の口が開く前にまた唇を塞ぐとちょっと不満そうな顔をした。

そして、何度がそんな遣り取りが交わされ、ようやく璃桜は観念した。

ハロウイン企画　トリック・オア・トリート　―１―

「トリック・オア・トリ―ト！」

１０月の半ばの日曜日、遼くんと手を繋いで

大きなショッピングタウンの前を通ると

突然、小さな男の子が目の前にやって来た。

ん・・・？

トリック・オア・トリ―ト？

不思議に思いながら周りを見てみると

ほとんどの人がオレンジと黒の色使いの衣装、

魔女やオバケの仮装をしていた。

どうやらハロウィンのイベントみたいだ。

そういえば、目の前にいるこの男の子も黒いマントと、
とんがり帽子をかぶっている。

「トリック・オア・トリート！」

男の子はもう一度そう言うとにんまり笑った。

“トリック・オア・トリート”

“お菓子をくれないとイタズラしちゃうぞ。”って意味だよね？

私はバッグの中から飴を出して男の子の小さな掌に乗せてあげた。

「はい、これで許してくれるかな？」

「うんっ！ありがとう。」

男の子は嬉しそうに言うと、トコトコと走って行った。

「璃桜、あそこでイベントやってるよ？」
背の高い遼くんは私より遠くの物がよく見える。
遼くんが指差した方に目を向けると
ショッピングタウンの前の広場に特設ステージが設置してあって、
たくさんの人だかりができていた。
「なんか、おもしろうだから寄っていこうか。」
「うんっ。」
特設ステージの方に近づくと、そこでは『魔女コンテスト』をやっていた。
要するにミスコンのハロウィン版。

ちょうど結果発表をしているところだった。

『魔女コンテスト』だけあって、みんな魔女の格好をしている。

ステージ前の客席には若い男性ばかり。

「・・・そして、“ミス・魔女”に輝いたのは・・・っ！」

司会者の声とともにスポットライトが出場者全員を照らし、

「エントリーナンバー１５番、秋川遥さんっ！」と、

一人の女の子の姿を映し出した。

「あ・・・っ！あの子・・・」

遼くんはその女の子に見覚えがあるのか、

驚いた顔で指を差した。

「・・・？遼くん、知ってる子？」

「いや、知らない子だけど。璃桜、憶えてない？」

「？」

「ほらっ、あの子、花火大会の『浴衣コンテスト』で“ミス・浴衣”になった子じゃないか？」

花火大会って、遼くんと付き合い始めた日に行った、あの花火大会の事？

確かにあの時もミスコンをやっていた。

「髪をアップにしててさ、黄色い帯と同じ色の花の髪飾り付けてて紺色の浴衣着てた子。

その時も“ミス・浴衣”に選ばれてたじゃん。」

「・・・あーっ。」

遼くんにそう言われて私はじっとその女の子を見た後、

ようやく思い出した。

「すごい・・・このコンテストもミスに選ばれたんだ。」

「もしかして“ミスコン荒らし”なのかな？」

「あはは、どうかな？」

「でも、あんだけ可愛かったらどのミスコンに出ても

優勝しちゃうよなー？

しかもモデル体形だし、何着ても似合いそうだし。」

遼くん・・・鼻の下伸びてる・・・。

「あーゆー子がタイプなんだ？」

「え・・・いや、別にそーゆーワケじゃ・・・。」

「どうりで花火大会のミスコンの事もよく憶えてるワケだ？」

「り、璃桜？」

「どーせ、私はあんなに可愛くないし、スタイルだってよくないもん。」

私がプイッと顔を背けると、ステージの上でものすごいフラッシュを浴びている“ミス・魔女”が視界に入ってきた。

“ミス・魔女”の証、ファーがついた黒いマントと王冠の代わりに魔女の象徴の一つでもある杖を持ってにこにこしている。

「遼くんも写メ撮ってくれれば？待受にできるし。」

「もうっ、何言ってんだよ。撮るワケないじゃん。」

「だって、鼻の下伸びてるよ？」

「伸びてない。」

「伸びてるもん。」

「伸びてねぇし。つーか、別にタイプじゃないけど？」

「じゃあ、なんであの子の事、あんなに憶えてたの？」

私が顔を覗き込むと、遼くんは「ぅ・・・。」と声を詰まらせた。

ほら、やっぱりタイプなんじゃないの。

すると、遼くんはジーンズの後ろのポケットから携帯を出した。

ホントに写メ撮りに行く気なんだ・・・。

ハロウイン企画　トリック・オア・トリート　―2―

「確かにあの子は可愛いけど、あんな風に
バシバシ撮られてニコニコしてる子より、
俺はなかなか撮らせてくれない子の方が興味ある。
ちなみにその子が今、俺の待受画面になってるけど。」
俺は携帯を開いて、璃桜に待受画面を見せた。

「え・・・これ・・・。」
予想通り、璃桜は口をパクパクさせた。
だってそれはそうだろう。
普通に考えたら俺が絶対に持っているはずのない
写メなんだから。

「な、なんで？なんで、遼くんがこの写メ持ってんの？」
璃桜は俺の携帯と俺の顔を交互に見た。

「さぁ？なんでだろー？」

ちなみに俺の携帯の待受画面は

笑っている璃桜の写真。

おそらく教室の中で撮った物だ。

“おそらく”というのは俺自身が撮った訳じゃないから。

「だって、これ・・・」

「栗田さんに送ってもらった。」

別に隠し通す必要もないし、俺は種明かしをした。

「アキに？」

「うん。だって、璃桜が恥ずかしがって
なかなか撮らせてくれないから。
栗田さんにまた伏兵になってもらったの。」
璃桜は俺に撮られるのが恥ずかしいらしく
「写メ撮りたい。」って言ってもなかなか撮らせてくれない。
だから俺はまたまた栗田さんに協力してもらった。

「せっかく、手に入れた写メなんだし、
璃桜以外の写真を待受にするつもりないから。」
俺がそう言うと璃桜は顔を赤くして黙り込んだ。

「トリック・オア・トリート！」

あ・・・？

いつの間にかさっきの男の子と同じ様に
魔道士の格好をした小さな男の子が俺達の前にやって来ていた。

「あー・・・、えっと・・・ごめんね。お菓子持ってないの。」
璃桜はさっきの男の子にあげたのが全部だったらしく、
少し身を屈めて申し訳なさそうに男の子の頭を撫でた。

俺はお菓子なんて持ち歩かないしな・・・。

その場合、イタズラされるって事か？

「じゃあ、お姉ちゃん、コレあげる。」
男の子はそう言うと璃桜の手に何かを握らせて
「バイバーイ！」と素早く走っていった。

何だ、あれ？

璃桜は不思議そうな顔をしながら男の子の後姿を見送り、

握っている手に視線を戻すとゆっくり拳を開いた。

「きゃあっ！？」

その途端、璃桜は悲鳴をあげて、握っていたものを思わず放り出した。

俺は地面に落ちた物を拾った。

蛙だ。

・・・といっても、もちろんゴムで出来た作り物。

小さくてプニプニしてて、綺麗な緑色した結構可愛いヤツ。

「はい。」

俺が璃桜に蛙を差し出すと璃桜は「えー、いらないよぉ。」とちょっとだけ涙目で言った。

「璃桜、蛙苦手？」

「うん・・・。」

まぁ、だいたい女の子はみんなそうだろうな。

「じゃ、コレ俺が持って帰る。」

「り、遼くん、蛙好きなの？」

「いや、別に好きとかじゃないけど、明日学校に持っていって

タカをびっくりさせようと思って。」

「あ・・・、そう。」

璃桜が顔を引き攣らせていると、

「トリック・オア・トリート！」

と、今度は俺の後ろから声が聞こえた。

ん・・・？

振り向くと青い目をした金髪の小さな可愛らしい

外人の女の子が立っていた。

俺も璃桜も何にも持ってないけど、まさかこの蛙を

あげるワケにもいかないしな。

女の子は俺達がお菓子を持っていないと気がつくと
小さな白い手をヒラヒラさせて俺に顔を近づけるように手招きした。

「ん？」

俺がその女の子に目線を合わせるようにしゃがむと
女の子は俺の頬にチュッと小さく音を立ててキスをした。
そして、さっきの男の子同様、「バイバーイ！」と言って
走って行った。

「・・・・。」

俺はしばし放心状態になった。

・・・て、ほんの2，3秒だけど。

ふと、璃桜の顔を見るとちょっと拗ねたような顔をしていた。

あ・・・そーだ。

「トリック・オア・トリ―ト！」

「へ？」

「だ・か・ら、トリック・オア・トリ―ト。」

俺がそう言うと璃桜はキョトンとしていた。

「お菓子あげなかったら、どーなるの？」

「もちろん、イタズラかな？」

「イ、イタズラって何するの・・・？」

「さぁ？何かなぁ？」

「・・・。」

「大丈夫、そんなに意地悪な事しないよ。
けど、俺のお願い聞いて？」

「な、何？」

「せっかくハロウィンなんだからさ、
パンプキンパイでも食べに行こうよ。」

ホントは「写メ撮らせて。」と言いたいところだけど。

「う、うん。」

璃桜は無謀な要求じゃなかった事にホッとしたのか、
コクッと頷いた後、小さく笑った。

写メはまた今度・・・。

そして、俺と璃桜はまた小さな魔道士達に捕まる前に
ショッピングタウンの中にあるカフェに入った――――。

――――翌日。

「おぃっすー。」

教室に入るとタカのヤツがなんだかニヤニヤしながら
携帯を見つめていた。

朝から何やってんだ？

「おぅっ、リョウ、見てくれコレ。」

タカは俺が席に着くなり、携帯の画面を俺に見せた。

そこには・・・

昨日の“ミス・魔女”が写っていた。

「昨日さー、ハロウィンのイベントで超可愛い子みっけた♪」

タカ・・・あの中にいたのかよ・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4533e/

HERO

2010年12月2日17時18分発行